

日本花壇考

—— 街路花壇研究に向けた若干の整理の試み

岩本陽児 *IWAMOTO Yohji*

- はじめに
1 —— 前栽から花壇へ
2 —— 幕末・明治以降
3 —— 大正・昭和
—— おわりに

【要旨】本稿では、主に文献研究の手法により、奈良・平安朝エリートの邸宅という独特の空間に発生し、形を変えながら現在に続く「前栽」、中国に発生した花壇概念と室町期の「花壇」、江戸期の園芸書に見られた「花壇」の実態をまず確認した。次に明治以降を取り上げた。街路樹導入や都市公園建設と並行して、学校の校庭や民家にも花壇が普及した。しかし、街路の緑化は、戦後復興期の都市整備と、戦後創設された社会教育制度が中核的な役割を担った「新生活運動」の一領域である国土を美しくする運動、いわゆる「国土美運動」を待たなくてはならなかった。かくて都市のパブリックスペースに普及した花と緑の景観は、地方行政が新自由主義に転じる中で、新たなマネジメントの段階に入っていった。

—— はじめに

東京・多摩市は、公園および街路沿いの花壇管理に里親制度を導入した先駆的な自治体のひとつである。私はここ数年、多摩市の恵泉女学園大学有志による「未来の街路花壇を考える会」¹⁾ 会員として、ひとり園芸・ガーデニングのみにとどまらず都市景観論、公共空間論、行政・市民の協働、ボランティア論など多様な側面を含んだこの街路花壇研究という魅力的なテーマに取り組んで多々啓発されてきた。この過程で、この研究を史的な文脈に位置付けるために、従来の庭園史とは異なる見地から、街路花壇に至る花壇の系譜を整理したいと考えた。

本稿では、主に文献研究の手法により、奈良・平安朝エリートの私邸という独特の空間に発生し、形を変えながら現在に続く「前栽」から、中国起源の花壇概念と室町期に出現した「花壇」、江戸期の園芸書の「花壇」の実態をまず確認した。幕末・明治以降、街路樹導入や都市公園建設と並行して、公共空間、学校・民家にも花壇が普及した。しかし街路への花壇設置は、戦後復興期の都市整備と、戦後創設された公的社会教育の制度が中核的な役割を担った「新生活運動」の、第二ステージとして重要な領域となった国土を美しくする

運動、略称「国土美運動」を待たなくてはならなかった。

1 —— 前栽から花壇へ

ここではまず、花壇の前形態である前栽^{せんざい}すなわち、貴族の邸宅に隣接して設けられた植栽を確認し、中国起源の花壇の展開を見る。

前栽

貴族が屋敷前に植栽を施して、建物から見下ろす花や虫の音をめで、社交の道具立てとして使う習慣は、平安文学の重要な舞台装置のひとつである。この「前栽」は漢字熟語だが、中国語での用例は管見の限り見当たらない²⁾。寝殿造りの庭について文学の立場から考察した倉田実³⁾は、これが邸宅の規模にかかわらず必ず造作され、木立（樹木）を含める場合と、草花のみを指す場合があったと指摘する。植物は播種よりも移植が多く、「前栽掘り」により近郊から調達された⁴⁾。お互いの邸宅を訪問しての花見、花や根株の贈答も行われていた（倉田 2018、pp.9-10）。

このように平安貴族のイメージが強い前栽だが⁵⁾、『日本国語大辞典』（以下、『日国大』と略す）に従えば、〔7C後～8C〕の催馬楽が初出という⁶⁾。なお『日国大』は前栽を草本・木本でなく植え込みの植物（草木）と、植え込みのある庭とに分けて解説している。

『日国大』の「前栽」の用例

(1) 庭前に植え込んだ草木。また、植え込むための草木。庭先の植込み。

* 催馬楽〔7C後～8C〕浅緑「新京朱雀のしだり柳 または田居となる 前栽秋萩撫子」

* 古今和歌集〔905～914〕哀傷・八五三・詞書「もとありしせんさいもいとしげく荒れたりけるを見て」

* 伊勢物語〔10C前〕二三「をとこ、〈略〉せんさいの中にかくれゐて」

* 小右記一長和元年〔1012〕九月六日「今日雲上人々向嵯峨野、嶮前栽、可殖皇大后宮之由」

* 源氏物語〔1001～14頃〕帚木「田舎家だつ柴垣して、せむさいなど、心とめて植ゑたり」

(2) 草木を植え込んだ庭。寝殿造りの場合、正殿（寝殿）の前庭。のちには、座敷の前の植込みのある庭。

* 伊勢物語〔10C前〕五一「昔、をとこ、人のせんさいに菊うゑけるに」

* 今昔物語集〔1120頃か〕三・一五「各南殿の前の前栽の中池の淀みにして」

* 徒然草〔1331頃〕七二「賤しげなる物、〈略〉せんざいに石・草木の多き」

* 浮世草子・好色一代男〔1682〕七・六「前栽（センザイ）におりて萩の袖垣など物

静に詠めて」

* 随筆・守貞漫稿〔1837～53〕二「京坂も民屋副添すと雖ども江戸よりは寛し。故中以上多少後園あり。俗に前栽或は壺の内と云。江戸にては唯『庭』とのみ云」

別の用例に、『凌雲集』（814）収録の藤原冬嗣（775-826）「奉和聖製宿旧宮応製」がある。

林泉舊邸久陰陰。今日三秋錫再臨。
宿殖高松全古節。前栽細菊吐新心。
荒涼靈沼龍還駐。寂歷稜巖鳳更尋。
不異浦中聞漢筑。謳歌濫統大風音。

頷聯を『日本古典文学全集』では「しゅくしよくのこうしょうはこせつをまっとうし、せんざいのさいぎくはしんしんをはく」と読み、「昔植えられた松は立派に育って青々と茂り、節操の正しさを相変わらず示し、庭の小菊も、新鮮な花のしべをいっせいにのぞかせている」と解釈する⁷⁾。つまりこの「前栽」は、既に日本語化している事が分かる。

前栽には、どういう植物が植栽されていたのだろう。『日国大』の用例は、ハギ、ナデシコ、キクである。倉田上掲書（pp.163-164、pp.178-179）はサクラ、ウメ、ススキ、イネ、淡竹の一種という呉竹（p.185）⁸⁾。オミナエシ、マツ、カシワ、ヤマブキ、マユミ、ウグイスカグラ、ウツギ、アサガオ（pp.203-234）を指摘する。キク、ウメ、イネ、アサガオを除けば多くは在来の自生植物である。

花壇の語と用例

次に、花壇の検討に入る。これまた漢字2文字の熟語である。花はさておき、「壇」の字義を確認しよう。『康熙字典』は『説文』、『礼記・祭義』、『史記・文帝紀』他の用例を挙げる。北京の「天壇」に見るように、要は祭祀のために周囲よりも高くした場所が壇である。『字通』は「祭祀の儀場として設けたところをいう。土を盛り上げたところは壇、土を平らかにしたところは場」としている。

こと花壇には、中国語・日本語に意味上の大きな違いはないように見える。

花坛 [huā tán]⁹⁾

种植花卉的土台子。

唐 李建勋 《和判官喜雨》：“高檻气浓藏柳郭，小庭流拥没花坛”

鲁迅 《朝花夕拾・从百草园到三味书屋》：“三味书屋后面也有一个园，虽然小，但在那里也可以爬上花坛去折腊梅花。”

『日国大』

(1) 草花などを植えるために平地の一角を区切り、土を盛り上げるなどしてつくった所。花壇。

* 羅 葡日辞書 [1595] 「Floralia 〈略〉 Quada (クッダン)、ハナゾノ」

* 虎明本狂言・若市 [室町末～近世初] 「これは身共が花だんの花じゃが、なぜにとてきた」

* 俳諧・毛吹草 [1638] 二 「花壇 (クッダン)」

* 真景累ヶ淵 [1869 頃] 〈三遊亭円朝〉 三八 「一寸した門の形がある中に花壇など」

* 田舎教師 [1909] 〈田山花袋〉 四七 「新たにつくった学校の花壇」 (後述)

* 李建勳一和判官喜雨詩 「高檻気濃蔵柳郭、小庭流擁没花壇」

(2) 大阪および兵庫県あたりで、別宅の異称。

「花壇」の用例として日・中共に一節が引用されている李建勳 (簡体字で勳) の唐詩「和判官喜雨」の全文は次の通り。

去禱山川尚未还。云雷寻作远声寒。
人情便似秋登悦。天色休劳夜起看。
高檻气浓蔵柳郭。小庭流拥没花坛。
须知太守重墙内。心极农夫望处欢。

『百度漢語』によれば作者李建勳 (勳) は字 (あぎな) を致堯といい、広陵 (今の江蘇省揚州) の人。西暦 952 年に約 81 歳で没した。この七言律詩は文学的な誇張表現に満ちていてにわかには意味を取りづらいが、山の中の宿所で夜半の雷で爽やかに目覚めた作者が、部屋から出て豪雨の風情を楽しんでいる内容とみえる。「没」は文字通りには水没の意味であり、mò の読みが適切という¹⁰⁾。小川 (2013、p.88) は「高檻気は濃やかに 柳郭を蔵め、小庭 流れは擁きて 花壇 没す」と訓読し、花壇は「花を植える台」としている¹¹⁾。実際の水没でなく、激しい雨に煙っていると解したい。他の用例は時代を下って 20 世紀の魯迅『朝花夕拾』である。中国語としては一般的ではないのかもしれない。

日本の初期花壇について

では、日本に「花壇」はいつごろ現れたのであろうか。小野 (2004、pp.62-63) は「花壇」の語がはじめて現れるのは『看聞御記』応永 25 年 (1418) 2 月 28 日条で、以後『陰涼軒日録』『実隆公記』など、室町時代後半の文献にその用例が見えるとする¹²⁾。飛田 (1997¹³⁾、2002¹⁴⁾) にも同様の紹介がある。

これらの用例のそれぞれについては、飛田が次のように紹介している¹⁵⁾。

○伏見宮貞成親王は応永 25 年 (1418) 2 月 28 日に、伏見殿の東庭に花壇を築いて草

花を植えている。』『看聞御記』(飛田 2002、p.343)

- 彼はまた、洛中の一条東洞院邸でも永享9年(1437)2月21日に「常御所の北向に草花を植え、花壇を築き籠を造る」ことをしている。『看聞御記』(飛田 1997、p.386)
- 足利義政が再建した室町殿、『蔭涼軒日録』の長祿4年(1460)4月3日の条「当帰草一叢を北の華壇に移さる」¹⁶⁾。
- 三条西実隆(1455-1537)の日記『実隆公記』の長享2年(1488)12月6日の条「庭前の花壇等これを沙汰す」。洛中の武者小路の邸宅に花壇を築いている。

これらに従い、初出の『看聞御記』について以下に見ていきたい。『看聞日記』ともされる本書の執筆者、伏見宮貞成親王(1372-1456)は室町時代の皇族で、後花園天皇の父。当該箇所は原文では「廿八日晴東庭築花壇栽草花」¹⁷⁾。「築」は、従来の前栽と異なる土盛りを示唆している。しかし、土を突き固める意味のある築の語が花壇づくりに使われることには、私の理解が及ばない点もある。

建築史家の川上(1957、p.88)は貞成親王が花壇を作った伏見殿の経歴を整理し、山荘御所としての院御所の典型、貞成親王は、父親王の薨去後の不遇の期間をここで過ごしたこと、ここが棟数の少ない狭少施設で、洛中の邸宅と比較すると極めて野趣の多いわび住居であったことを指摘している¹⁸⁾。

飛田は、一条兼良の編とされる『尺素往来』に室町時代の前栽の植物が114種類あったことを紹介したうえで、室町期の花壇設置の理由を「花木や草花の栽培が盛んになり、小さなものや珍しいものを育成し、鑑賞するためではなかったか」と考察している(飛田 2001、p.10)。

室町時代には15世紀初頭くらい勘合貿易が行われ、中国・明の文物が請来されていた。こうした国際関係の中で「花壇」の語彙もエリート層に知られるようになったのだろう。ただし後年の小石川における「礫川」のように、前時代からの「前栽」と同じしつらえに「花壇」というハイカラ語を当てた可能性もあり、発掘調査も含めた今後の資料に期待したい。

これに比べると、物証が先立つのが福井県福井市の一乗谷の朝倉氏居館の「花壇」遺構である¹⁹⁾。1968年度に行われた発掘調査で、館内中央東部にある161平米の中庭の西部から、石圍遺構SX25が検出された。これは東西9.8メートル、南北2.85メートルあり、「何のための施設か判断に苦しむが、花壇と推定すると、すべてうまく説明できるようである」と奈良国立文化財研究所の牛川喜幸は考察した²⁰⁾。傍証として、江戸時代に描かれた銀閣寺の花壇(『都林泉名勝図会 卷二』所収)²¹⁾が参考にされ、5個の穴は植穴、中央に列状に置かれた石は作業用通路と考えられた。

飛田(1998、p.385)は花壇について、最初に定義があって花壇が築かれたのではないから、固定観念を捨てないことには江戸時代までの日本の花壇の形態は見えてこないとし、

菅原道真『菅家文草』所収の漢詩から菊が畝に植えられていたことを指摘して「花壇の特性とは、植物の生育を第一に考えて、その次に庭園施設としての見栄えを考慮することにあるように思われる」としている。

花壇のほか、この時期には「花畑」が現れる。上越・春日山城跡²²⁾に「御花畑跡」、会津・嶋山城跡の曲輪のひとつに「御花畑」の名称が与えられている。

上杉謙信の居城であった春日山城では、上越市教育委員会により1977年度以降発掘調査が進められ、概報11冊と本報告が刊行されている。ただしこれらの発掘は城下の範囲確定のための調査で、山城部の本丸近くの曲輪「御花畑」は発掘区とはなっていない。この名称について伊藤(1967)は、科学的な検証を経たものでないことを断っている²³⁾。

嶋山城では昭和54年の「上千畳」発掘調査で、書院建築に伴う「石組による溝状遺構、集石遺構である池泉もしくは池汀遺構」が検出され庭園と想定されているが、御花畑については「御花畑には、40mに25mほどの一段高く構えられた雛壇状の削平地である。おそらくは、春日山城のごとく、薬草や籠城戦に備えての植栽があったものと思える」と述べるのみで、名称の由来を明らかにしていない。なお戦国期の鎌倉・玉縄城、近世大名の居城である小倉城、平戸城、小浜城、岡山城、金沢城、高松城、広島城。幕府の江戸城や駿府城の御花畑。会津若松城の御薬園の類例を紹介している(嶋山城発掘調査団1991、p.16)²⁴⁾。

江戸期の園芸書に見る花壇

16世紀半ばのポルトガル船の長崎来航以来、日本は欧州世界の「大航海時代」に組み込まれ、その結果、新大陸原産種を含む従来にはない多様な植物が導入された。トウガラシもそのひとつで、当初は観賞用植物であったという²⁵⁾。元々多様な自生植物に恵まれていた日本が、江戸時代に園芸大国を誇ったことはよく知られている。まず支配階級層に椿に始まる各種花木の普及があり、次いで裕福な市民の間で鉢植え草花・葉物が流行した²⁶⁾。これは江戸後期のバロック趣味ともいえる斑入り・奇形植物への独特の愛玩へと発展していくが、金融商品が未発達であった初期資本主義時代ならではの投機対象としてエスカレートした点は、17世紀前半のオランダ共和国が経験したオスマントルコ伝来のチューリップによるチューリップバブルを彷彿させる。なお飛田(2001、p.12ほか)は、江戸時代の大名庭園が花壇の普及をもたらしたと指摘している²⁷⁾。これは、同時代の英国の風景式庭園が依然、花の咲かないガーデンであったことと好対照である²⁸⁾。

17世紀後半から19世紀前半にかけて園芸書の板行が活発化し、一部は標題に「花壇」を使用した。新日本古典籍総合データベースおよび国立国会図書館OPACにより調整したものを下記する。

- ①水野元勝 松井頼母増補『花壇綱目』山本八兵衛、寛文4(1664)稿、延宝9(1681)刊²⁹⁾
- ②伊藤伊兵衛三世『花壇地錦抄』元禄8(1695)刊³⁰⁾

- ③志水閑事『花壇養菊集』上村四郎兵衛、正徳5 (1715) 刊³¹⁾
- ④養寿軒雲峰『花壇菊花大全』上村四郎兵衛・谷口七左衛門、享保2 (1717) 跋³²⁾
- ⑤華文軒風子『花壇大全地錦抄』宝暦7 (1757) 刊³³⁾
- ⑥『増補花壇大全』菱屋孫兵衛〈京都〉、林伊兵衛〈京都〉、須原屋茂兵衛〈江戸〉、河内屋八兵衛〈大阪〉、河内屋吉兵衛〈大阪〉、今津屋辰三郎〈大阪〉、松本新助〈大阪〉、文化10 (1813) 刊 別書名『花壇叢木画譜』³⁴⁾
- ⑦壺天堂主人・森春溪画『花壇朝顔通』河塩書屋、文化12 (1815) 刊³⁵⁾
- ⑧屋代通賢『通賢花壇抄』須原屋茂兵衛、文政11 (1828) 刊³⁶⁾
- ⑨菅井菊叟・池田英泉画『菊花壇養種』和泉屋市兵衛、弘化3 (1846) 序³⁷⁾

これらを通読して分かるのが、書名に「花壇」とあっても実際の花壇作りに言及したものは③④⑨のみとむしろ少なく、残りの①②⑥⑦⑧は実体概念としての花壇との関係が不明瞭ということである。この現象をどう理解すればよいのだろうか。

推測の域を出ないが、この時代の「花壇」には単に物理的に土を盛った花づくりの場所という意味だけでなく、あたかも「文壇」が、重鎮を頂点とするヒエラルキーを形作った文学者世界を意味したように、「花づくり世界」もしくは「ガーデニング・ワールド」のような意味あいでも使われていたのではないだろうか³⁸⁾。

さらに想像をたくましくするなら、連想を生んだのは内裏雛を頂点とする桃の節句の「雛壇」であったかもしれない。雛壇はすでに18世紀後半の江戸時代、宝暦・明和 (1751～72) 頃には2～3段、安永 (1772～81) 頃には4～5段、江戸末期になると7～8段にもなっていた³⁹⁾。園芸世界におけるヒエラルキーやランキングに関しては、相撲の番付表にならった一枚物の「名鑑」が、万年青 (オモト) 富貴蘭 (園芸名フウキラン、和名フウラン) 等のジャンルごとに刊行され、多くが今に至って「古典園芸植物」の特徴となっていることも、示唆的である。

2 — 幕末・明治以降

幕末の開港、その後の明治政府の「文明開化」政策により、園芸のみならず都市景観も大きく変化した。いくつかの例をみておきたい。

街路樹・西洋式庭園の誕生

街路は、交通インフラであると同時に、都市のオープンスペースでもある。街路景観を特徴づける植栽、すなわち街路樹は、一般には開港地横浜・馬車道への1867 (慶応3) 年の植栽が先駆とされる⁴⁰⁾。これは商店主が店舗の道路側に黒松・柳を「自費植栽」、要は勝手に植えこんだもので、現代の街路樹とは大きく異なっていたとの指摘がある (近藤・平野 2017、p.53)⁴¹⁾。

街路樹について明治15年生まれ、の矢田挿雲(1882-1961)は、関東大震災前の報知新聞連載で、明治初年に津田仙が大久保内務卿に勧めて大手門と竹橋門との間にある平河門付近の堀端にセンダンを植えたことを、明治年間における街路樹のさきがけとしている。徳川時代唯一の街路樹は、万世橋から浅草橋までの神田川南岸に植えた柳並木という。いずれも、矢田の時代までには枯死が進んでいた(矢田1980、p.35)⁴²⁾。水辺のプロムナードのアメニティ向上が目指されたのだろうか。

明治維新によって、庭園はどう変化したのだろうか。日本園芸研究会(1918)⁴³⁾は、全645ページ中、第十篇に収録された小澤圭次郎「明治庭園記」⁴⁴⁾が過半の340ページを占めている。小澤は本稿で明治の庭園を10年ごとの4期と、残り期間の都合5期に分けて検討しているが⁴⁵⁾、pp.176-177に文部大輔田中不二麿が、湯島新花町に米国の田舎家風の平屋洋館を構えて欧州風庭園をつくった記事がある⁴⁶⁾。1876(明治9)年4月3日に開催された田中の再洋行前の送別会に、東京師範学校長補だった小澤は招かれた。「花壇と樹木植溜を混合」してあり、高価なバラの鉢植えを台の上に数多く並べていた。1883(明治16)年開館の鹿鳴館時代に先立ち、政府要人の一部が西洋趣味を導入していたことが分かる⁴⁷⁾。新しい伝統となる盆栽趣味のパトロン、愛蘭家・キク愛好家として知られる大隈重信(1838-1922)は、早稲田の自宅に70坪の温室を建てるほどの園芸ファンであった。かれらの庭園がいかなる「花壇」を伴うものだったかは、今後の調査に俟ちたい。なお、「日本庭園」の語は海外の万博での用例が先行した。国内の庭園についてこう呼んだのは、福羽逸人の「桂離宮の如きは日本庭園の模範にして」の用例が早い⁴⁸⁾。

ところで、明治期以降に西洋から導入された花壇は、われわれになじみのものだが、江戸期の花壇の上記した意味合いを考えると、これがflower bedの翻訳語であった可能性も皆無ではないと考える。福沢諭吉～西周あたりに、調査の余地があるかもしれない。

なお、明治期には従来になく多様な園芸植物が導入された。本稿ではこれらについて詳述はしないが、明治年間舶来の植物については上掲書の第六篇に詳しい。

明治の新聞に見る花壇

新時代の到来を特徴づけるメディアに新聞がある。新聞は、花壇という語彙の普及にも力があつたと思われることから、初期の例を調査した。

読売新聞では、花壇は1875(明治8)年以降に登場する。菊が大半で、牡丹が若干。つまり、江戸時代からの趣味が継承されていたことが分かる。1878(明治11)年には、フランス万博の花壇紹介や、花壇用の菊の広告がある。この時代の菊花壇は、見ごろを迎えた菊を移植した観賞用速成花壇だったことがわかる。

①1875(明治8)年11月7日朝刊 東京・芝二本榎の長寿園。菊花壇が見事

②1876(明治9)年11月20日朝刊 東京・浅草の菊。花壇・鉢物とも見事 花の門も好評

- ③1878 (明治11) 年 8 月 25 日朝刊 仏国博覧会会場略報・続 会場前の庭園に雨傘を立てたような花壇
- ④1878 年 (明治11) 11 月 5 日朝刊 [広告] 花壇菊／広尾笑花園 (1880.11.05 東京朝刊にも)
- ⑤1879 (明治12) 年 6 月 22 日東京朝刊 花壇ではないが、靖国神社の相撲場 (土俵) を移設して元の場所は「花園」にするとの記事がある。
- ⑥1880 (明治13) 年 11 月 2 日東京朝刊 池上本門寺が例年通り菊の花壇を造成 見ごろは7日ごろから

朝日新聞には、次の記事がある。

- ①1879 年 3 月 6 日大阪朝刊 当博物場門前の浜手の建家跡に花壇を設置
- ②1879 年 10 月 15 日大阪朝刊 住吉の待合茶屋に大菊用十五間の花壇
- ③1879 年 11 月 12 日大阪朝刊 [広告] 梅の恵 菊花壇⁴⁹⁾

なお 1880 年 3 月 28 日以降に大阪朝刊に現れる広告「常盤花壇」は、明治初年に前田又吉が花隈で始めた温泉料亭という⁵⁰⁾。

このように、明治の初め近くにメディアに登場した花壇には、花の時期に境内や盛り場に即席造成される菊花壇が多く、植物をそこで育て開花させる花壇とは異なっていた。菊については早くも平安時代から、「特殊でして……開花期に庭園の主だったところに植える。終わったら抜いてしまう」との飛田 (2007、pp.90-91)⁵¹⁾ の指摘がある。この明治の初めの菊花壇を、江戸時代いらい継承された文化の産物と見るなら、江戸時代の町方の菊花壇だけでなく、町方から植木屋が出入りしてメンテナンスに当たっていたと思いきり遊式大名庭園の花壇についても、その実態を再検討する余地があるかもしれない。

毛氈花壇・境栽花壇 (ボーダー) と日比谷公園・新宿御苑

英国式庭園の異名をもつ風景式庭園が、産業革命により世界から獲得した富を背景に、貴族や東インド会社社長などのビジネスエリート of 壮麗な邸宅で広く行われた英国では、19 世紀ビクトリア時代 (1837-1901) に入り、それまで花がなかった庭園の一角に花壇が導入されるようになった。庭園・公園⁵²⁾ の花壇植栽として、二種類がよく知られている。

ひとつに、開花した丈の低い一年生植物を明確なデザインに従って密植し、模様やイメージ、文字を表現する毛氈花壇 carpet bedding。1860 年代にバッキンガム州のカントリーハウス「クリプデン」のヘッドガーデナー、ジョン・フレミングが普及させた。1900 年頃にはアリス・ロスチャイルドが、バッキンガム州の屋敷「アイスロープ」で大きなバスケット型の立体的な絨毯花壇を導入。両者とも、ほどなく全国の公園や庭園に取り入れられた⁵³⁾。

生垣を背に、芝生を手前にして、奥には背丈のある、手前には丈の低い多くは宿根草を植栽したボーダーは、境栽花壇と訳されることがある。これも、起源は毛氈花壇と同時期だが、都市公園のようなパブリックスペースだけでなく、中産階級の私邸とくに第一次大戦後の郊外型住宅の庭で愛好され、現在に至っている。

こうした西洋の花壇は、日本にはどのように導入されたのだろうか。初期の西洋式庭園を二例、取り上げたい。

日本最初の洋式近代公園とされる東京・千代田区の日比谷公園は、1903（明治36）年に開園した。1886（明治19）年の日比谷練兵場（旧陸軍操練所）青山移転を受け、2年後に公園設置が提案された。翌1889（明治22）年の「東京市区改正設計」により、現・日比谷通りなどと合わせた公園整備を正式決定。日清戦争後の1900（明治33）年に日比谷公園造園委員会を設置し、林学博士本多静六らに設計を依頼した。ドイツ留学経験のある本多はドイツの公園を範としたとされ、園内二か所の花壇や噴水、音楽堂、運動場などを計画した⁵⁴。

新宿御苑は、明治維新後に国営の農事試験場となり、1879（明治12）年に宮内省の御料地「新宿植物御苑」となって西洋花卉・蔬菜・温室などの研究施設が置かれた土地である。1900年頃から宮廷庭園への改造構想が進み、1902年から5ヵ年計画で造成が開始された。設計はベルサイユ園芸学校教授アンリ・マルティネ、監督は福羽逸人と市川之雄。日比谷公園に遅れること3年。1906（明治39）年に「6ヵ所の池、花卉園、果樹園、蔬菜園、動物園」を備えた西洋風宮廷庭園が完成し、皇室が賓客をもてなすパレスガーデンとなった。ただし一般公開は、1949（昭和24）年に国民公園となってからである⁵⁵。

つまり、一般の日本人が公共空間で洋式庭園を目にするようになったのは、20世紀に入ってからと、意外に遅いことが分かる。ただ、教会やキリスト教系の学校等には別の伝統があったことも想定され、別途研究の余地がある。

花袋『田舎教師』の花壇

20世紀の比較的早い時点で発表された田山花袋の小説『田舎教師』（1909）からは、前記『日国大』で花壇の用例が採られていた。埼玉県羽生市役所のHP「田山花袋の小説『田舎教師』の舞台となったまち」はこれを、「実在の人物小林秀三が書き残した日記をもとに田山花袋が丹念な取材を行って書き上げた小説で、登場人物はほぼ実在した人々」と述べ、明治30年代の郷土資料としての価値を指摘している⁵⁶。

以下、該当部分を青空文庫版から引用する。漢数字は、オリジナルの節番号である。

十九 庫裡の玄関の前に、春は芍薬の咲く小さい花壇があったが、そこにそのころ秋海棠が絵のようにかすかに紅を見せている。(用例①)

四十七 新たにつくった学校の花壇にもいろいろの草花が集められた。……

あけび、ぐみ、さぎごけ、きんぼうげ、じゅうにひとえ、たけにぐさ、きじむしろ、なんてんはぎなどを野からとって来て花壇に移した。やがて山吹が散ると、芍薬、牡丹、つつじなどが咲き始めた。(用例②)

四十九 野にとうご草があるのを見て、それをとった。そばにある名を知らぬ赤い草花は学校の花壇に植えようと思って、根から掘って紙に包み、汚れた手をみそはぎの茂る小川で洗った。(用例③)

五十 大家の主人はおもしろい話好きの人であった。……花壇にはいろいろ西洋種もまいて、天竺牡丹や遊蝶草などが咲いている。コスモスもだいぶ大きくなった。(用例④)

用例①の庫裏の玄関先の花壇は、実態として前栽との区別がたい。用例②は、新たに作った学校花壇に野の樹や花を移植したことと、春花壇の園芸植物を紹介している。移植品は観賞目的だったのか、それとも博物教育の参考品だったのだろうか。用例③の「とうご草」とは、何だろう。初版本では「たうご草」で草に「くさ」のルビがある⁵⁷⁾。木村(1988)⁵⁸⁾、『日国大』等を参照した結果、本来畑にあるべきリョクトウもしくはエンドウマメが逸出していたと考えたい⁵⁹⁾。用例④は、下宿先の大家の園芸趣味の紹介。自宅に花壇を作り、球根植物や一年草の園芸種を咲かせていたことが分かる。天竺牡丹はダリア、遊蝶草はパンジー。

明治30年代の地方都市の学校や自宅で、野山の草木や洋種の園芸植物による花壇がつけられていたことが分かる。

明治庭園と花壇

この時代の一般的な庭園で、花壇はどう位置づけられていたのだろうか。明治・大正期の生け花界の大家で小型庭園づくりの実用書もある近藤正一は、1910(明治43)年の『名園五十種』で、実見した「大園」を紹介している。多くは明治の官僚政治家、ビジネスエリート、いくつかは料亭・寺院の日本庭園である⁶⁰⁾。

花木への言及があるのは小石川林町の細川男爵別荘、小石川の三井氏の庭、大森の玉塚氏別荘など。草本については、石垣周りのナデシコ、池畔のカキツバタ、根メのツワブキが紹介される程度で(p.327、p.331等)、いずれも在来種の従来の使用である。麴町・永田町の鍋島侯爵家庭園は、欧州滞在が長かった侯爵が「カーデンやパークの尤も趣味の好いところを取って」作ったと紹介しているが(p.188)、花壇への特段の言及はない。

飛田(2002、pp.311-321)は、明治・大正時代の庭園が「文人風」から「自然風」に変化したことを指摘しているが、近藤の記述を見るかぎり、20世紀初頭の庭園は日本庭園と同義であり、花壇への記述を欠いている。飛田が述べた、江戸時代の大名庭園が生んだ花壇の伝統は、明治に入って途切れたのだろうか。ただ、この選択と観察は著者の嗜好の反映でもあり、判断が難しい。

震災復興都市公園の花壇と街路樹

1923年の関東大震災により、東京・横浜は大被害を受けた。震災後の1930(昭和5)年に刊行された『帝都復興事業大観』(内山1930)⁶¹⁾は、第18章に公園の章を置き、震災後に仮設住宅が立ち並んだ東京市内の公園について、劇的な変化を紹介している。例えば公園面積は震災前の43万3,624坪(134ha)から復興後96万4,188坪(318ha)と倍増して、市民一人当たりの公園面積も震災前の0.17坪から復興後は0.48坪と、3倍近くに増加してい

る⁶²⁾。上野、井の頭などの「恩賜公園」は、この時に下賜された。

限られた予算の中で都内の公園はいくつかにランキングされ、配置された。すなわち中央大公園（日比谷公園）、方面大公園（芝・上野・浅草・深川公園等）、方面小公園（麹町・白山・湯島・両国公園等）、および郊外大公園（飛鳥山・井の頭公園等）である。

同書には次のような花壇への言及がある。

日比谷公園は、洋風の大芝生花壇を「園内最も華麗な設備」としている⁶³⁾。上野・芝・浅草・隅田公園には花壇への特段の記載はない。浜町公園の中央は芝生で、ユッカを中心とした花壇がつけられ、和洋観葉植物 105 種、7400 本を植栽した⁶⁴⁾。

帝都復興計画による三大公園のひとつとして 1928（昭和 3）年に開園した錦糸公園は、「諸所に花壇があり、四季とりどりの花が妍を競っている」。

帝都復興事業の一環として計画された小公園 51 か所は、平均面積が 900 坪（3000㎡弱）で、罹災区域の小学校に隣接して設けられた。区画整理で宅地がどこも縮小され遊び場の余裕がなくなるとの切実なニーズに応えたものという。面積の 3～4 割を樹林花園、残りの 6～7 割を広場としたのは、非常時への備えだろうか⁶⁵⁾。小学校教科書所載の植物をなるべく植栽することとし、花壇を設けたところもある。平日の昼間は児童の運動遊技場、そのほかの時間は一般の休養散策地としての利用を企図した。小公園は東京市の直接管理として公園に一人ずつ園丁をおき、監督官を巡回させたが、「尚直接利用される附近の方々が自己の公園として愛護管理せらるべきである」としているのは、21 世紀の里親花壇制度への遠い伏線かもしれない。これらは東京市継続帝都復興費事業（大正 12 年度から昭和 4 年度までの年度事業）として行われ、3 分の 1 の国庫補助を得た⁶⁶⁾。

次に、街路樹についてみておこう。東京の街路樹は震災前に 2 万 4600 本だったが、震災前後には 1 万 260 本と半減した。これが復興後には 3 万 5500 本となり、震災前の 5 割増に近づいた。

樹種を見ると、街路樹としてイチョウ、キャラ、アスナロ、スズカケ。公園植栽用にマテバシイ、サクラ、キャラ、アスナロ、イヌツゲ、シラカシ、クス、クチナシ等が用いられた。これらの苗木は三鷹の東京天文台敷地内、千葉県松戸、明治神宮外苑の苗圃で養成された⁶⁷⁾。

これらから、1923 年の関東大震災を契機に、東京・横浜の公園整備と街路樹植樹による都市緑化が大きく進展したことが分かる。

このような形で都市の骨格形成が公的に行われたらっぽう、マイクロなレベルでの景観「美化」活動が民間有志によって行われていた。再び新聞記事に目を転じよう。

幻に終わった 1940 年の東京オリンピックを 4 年後に控え、省線下十条駅（現在の東十条駅）北口の土手 150 坪を花園に整備した渡辺喜助老（68 歳）の記事がある。隣接の西音寺（現存）でも 170 坪の藪の、翌春までの整備を目指した。「オリムピック大会までにはこの鉄

道沿線をみんな花にして見せませうぞ」⁶⁸⁾。

ところが戦前は、こうしたニュースは多くない。花壇の記事が現れだすのは、戦後 1950 年代に入ってからのことである。

戦後の街路緑化と花壇

1950 年の夏には、毎日新聞の趣味・娯楽欄に、千葉大学園芸学部浅山英一氏による秋花壇準備の記事が出た⁶⁹⁾。翌 1951 年 1 月の読売新聞は、新宿二幸前から新宿二丁目間の旧都電路線跡の 1500 メートルを、幅 3.6 メートルの緑地帯花壇とする商店街の計画を報じている⁷⁰⁾。同年 6 月には、新宿区役所と都が協力して新宿大通りの都電跡地に延長 400 メートル、幅 2.5 メートルの緑地帯花壇を造成した⁷¹⁾。池袋東口でも緑地帯花壇や噴水が作られた⁷²⁾。浅草六区では花壇工費の積立金不明のスキャンダルもあったが、都公園観光課による街路樹植樹が始まった⁷³⁾。都庁・区役所に花壇を設け「美術公園」にすることも決まった⁷⁴⁾。神宮内苑では、花壇研究会が開催された⁷⁵⁾。

銀座では、「ともすれば『植民地的』などとけなされる」都心の装いの改善を目指し「並木通り美化会」が道路交通・街路樹・街頭照明・衛生の四委員会を設置。中央区提供のプラタナス 150 本を植樹し、街路の各所に小花壇を置いてその両端に半地下式の共同ゴミ箱を設置。これらを翌春までに完成することとした。「銀座通連合会」では柳の下の花壇 100 か所が完成し、まもなく残り 180 か所の着工にかかることと報じられた。

千代田区役所は、都提供のしだれ柳 200 本を秋葉原駅から神田明神までの街路に植えた⁷⁶⁾。1953 年には日比谷で『秋の花壇展』が開かれた⁷⁷⁾。

新聞記事調査という性格上、情報には制約があるが、サンフランシスコ平和条約前後までに東京の「盛り場」で地元商店会が地域の改善に取り組み、これを行政が応援したこと、街路花壇の整備もその一環として行われたことが分かる。

都市計画家が見た花壇

こうした現象の背後には、どのような着想があったのだろうか。初田 (2005, p.218) は、東京都専門職員だった都市計画家石川栄耀^{ひであき} (1893-1955) を取り上げ、都市計画学会誌上で石川が「盛り場育成」に関し 5 点箇条書きした 5 番目、特に銀座に対する「企画指導」として、ネオンサイン・花壇等の市街整備の 5 点を挙げたことを指摘し、「西欧の広場に代わり日本の商店街・盛り場に独自にコミュニティ機能を見出し、田園都市の形の単なる移植に止まらずアーケード等日本独自の風景の形成を目指していた」と評価する⁷⁸⁾。

石川 (1953) の原文⁷⁹⁾ を参照した結果、商業地区の街路花壇は、「ショッピングセンターの社会性」に鑑み「都市美的な整備」対象として、仮設アーケードやネオンサインと同レベルで論じていたことが分かった。

これに対して、下町の狭隘な生活空間における花づくりの輪が地域に広がった事例を、新聞が紹介している。高齢男性が街路樹の下に蒔いたアサガオが契機となり、町内の協力

を得て季節の花が咲くようになった⁸⁰⁾。地域参加のコミュニティガーデンの、初期の例とみえる。

これら、自発的・自然発生的な取り組みとは違ったレベルで、都市の環境美化・緑化、花壇づくりが進められるのは、装いを新たにした新生活運動の一環としての「花いっぱい運動」を待たなくてはならなかった。

新生活運動と花いっぱい運動

新生活運動とは一般に、虚礼などを廃止して、生活を合理化・近代化しようとする社会運動（デジタル大辞泉）として理解されている。今となっては群馬県など一部に残るばかりだが、かつては戦後日本を特徴づける官民あげての大運動であった。地域でこの運動の主要な牽引役となったのが、戦後に創設された公民館および社会教育主事の制度である。

大槻（1982）⁸¹⁾によれば、敗戦後の郷土再建、片山首相の提起と鳩山首相による各界への協力要請を受けて1955年に新生活運動協会が発足。財団法人化を経て、都道府県の協議会との連携で運動が進められた。

その内容は「ハエや蚊の撲滅・冠婚葬祭の簡素化・虚礼廃止、つき合いの簡素化・貯蓄の励行・むだの排除・共同施設の拡充・時間の励行・公明選挙の推進・公衆道徳の昂揚・地域社会の民主化・その他」と生活全般に渡り、運動の担い手も青年団・婦人会、公民館、新生活運動協議会、部落会・町内会、農協青年部・婦人部、社会福祉協議会など多様な地域団体だった。大澤は同書（p.4）で「日常生活により密着した形で、生活の合理化、近代化さらには民主化をはかろうとするところに、特徴があった」と指摘する⁸²⁾。

こうした取組みは当初から農村部で活発、都市部で低調だったが、急激な社会変動のもとで、1960年代初頭までには「運動そのものの存在意義が問われる」状況となっていた。そこで新生活運動協会ではオリンピック東京大会の1964（昭和39）年の開催決定を契機に、1961年開始の「国土美運動」で東京都はじめ大都市部での新展開を企図した（大澤、上掲書 p.13）。

オリンピックの年から始まった表彰制度「美しい町づくり全国コンクール」は「美しい町づくり賞」「あすの地域社会を築く住民活動賞」と名称を変更したが、磯村英一・東洋大学教授や福武直・東京大学名誉教授が審査委員長をつとめた⁸³⁾。

反対型の住民運動が主流だった時代に⁸⁴⁾、もう一つの住民運動を顕彰、世論喚起が図られた。石油危機を契機に地域コミュニティづくりが新たに脚光を浴びた。これは、自治省（当時）のコミュニティ政策と並行したためかもしれない。

東京の社団法人東京都新生活運動協会の活動についてみると、事務局長が1960（昭和35）年度に交代したあと加盟団体を一挙に増やし、会長に都知事を推戴するなど組織の強化と、日本橋三越デパートでの展示会、「新生活音頭」などによるPR強化をはかった。85の指定地区活動の大半以上は美化清掃活動・花いっぱい運動で、「美化運動即新生活運動とまで言われた」。1961年度には、オリンピック開催地渋谷区全体を新生活運動モデル地区

に指定。「日本花いっぱい協会」とも共催して、花の種子袋をつけた風船の打ち上げが新生活運動のセレモニーの付き物となった。1962年度には数寄屋橋・六本木・新宿二丁目・都庁前・丸の内・大手門・気象庁前・赤坂見附・渋谷駅前での花壇づくり。都立園芸高校が「学校モデル花壇」の造成を指導しヒットしたという（大澤、上掲書 pp.14-17）。

東京都から他地域に目を転じると、1952年に「町を花いっぱいにする会」を結成した松本市では、12年後に当時15万市民全員がこの会の会員だった。京都鴨川を美しくする会、仙台市東部地区の梅田川河川環境浄化推進協議会の活動も知られている（大澤、上掲書 pp.48-51）。

国民の自主的・自発的な運動をうたいつつ実は官民協働という矛盾をはらんだ新生活運動は、社会状況の激変により1960年代初めまでに当初の運動継続が困難となっていた。東京オリンピックを契機に国土美化という第二段階の目標に向かった時に、行政が花苗を提供し市民が維持管理の「奉仕活動」に当たる街路花壇の祖型が形作られたと考えられる。

—— おわりに

従来、それ自体というよりは庭園史の一部として語られることが多かった花壇の系譜を総説的にたどることで、花と緑の景観が都市のパブリックスペースに現出・普及するに至った歴史を明らかにした。

通史からはエリート文化の下方拡散と、時代を超えて花を愛する人々の姿を確認でき、考古学調査を通じた平安以降の庭園研究には多くを教えられ、中国語の用例の意外な少なさや、江戸の園芸書に現れた花壇と無関係の「花壇」など、予期せざる発見があった。明治前期の速成菊花壇は江戸期の伝統を踏まえたものであろうが、花壇が植物の生育の場とは必ずしも限らないとの知見を得たことは重要である。これは新宿御苑で毎年11月に開催される「菊花壇展」への洞察を与えてくれるほか、一年生植物の定期的な更新を前提とした戦後の街路花壇への伏線のひとつとも考えられるからである。

エリートの可視化されたステイタスといえる庭園のほとんどが、明治以降も長らく日本庭園だったことは意外で、趣味の保守性が現れている。東京周辺では、関東大震災と第二次大戦の惨禍が都市景観の更新を促した。私をもっとも虚を突かれた発見が、「花いっぱい」の背景に戦後一時代を画した新生活運動があり、その牽引役が地域の社会教育主事だったことである。街路花壇の「里親制度」という新たなマネジメント・スタイルの登場は、本稿が考察対象とした時代よりも後、地方行政が新自由主義に転じて以降の物語である。地域の里親花壇関係者には「花いっぱい運動」を記憶する人もあり⁸⁵⁾、地域史アプローチも今後の課題と言える。

《注》

- 1) <https://www.gairokadan.com/> 2022年11月20日参照（インターネット情報の参照日は、以下すべて同様）。
- 2) 現代中国語では「栽」を動詞とした「前栽金銀后栽桂」のような対句表現や、何かの前に木を植える「门前栽樹」等の用法がある旨、田麒麟氏（株式会社デジタル・ナレッジ、桜美林大学修士）よりご教示を受けた（2022年10月16日）。
「盆栽」は、江戸後期の煎茶の茶会記録から発生したことをさいたま市大宮盆栽美術館学芸員田口文哉氏から指摘された（2017年10月11日のご教示による）が、前栽も、漢文調の文章からこの二文字が切り取られ、熟語化した可能性は皆無とは言えまい。今後の用例検出に俟ちたい。
田口文哉「盆栽の物語—語り継ぐ盆栽の歴史—」とくに連載第2回。『盆栽世界』エスプレスメディア出版、2015年5月号、pp.66-69。
- 3) 倉田実『庭園思想と平安文学 寝殿造から』花鳥社、2018。
- 4) 京楽真帆子 2007（奈良文化財研究所 2007の「討議録」での発言。『平安時代庭園に関する研究Ⅰ：平成18年度古代庭園研究会報告書』、p.70、p.72等）は、前栽掘りが権力政治の一面を持っていたこと、前栽が季節や行事など折に触れてフレキシブルに植え替えられ前栽を作る人の意識・意志が現れたことを指摘している。後者、21世紀の街路花壇とも共通する特性といえる。
- 5) 内田和伸「平安時代庭園発掘調査の概要」には、前栽遺構の報告はない。『平安時代庭園に関する研究Ⅰ（18年度）報告書 平成18年度 古代庭園研究会報告書』奈良文化財研究所 文化遺産部景観研究部、2007、pp.15-26。
- 6) 7世紀後半は飛鳥時代後半だが、『日国大』が時代を遡らせた理由は不明。『新選漢和辞典』は、催馬楽は元は奈良時代の馬を引くときの民謡で、平安時代になって雅楽に取り入れられたとする。
- 7) 『日本古典文学全集 86 日本漢詩集』p.47。
- 8) 牧野富太郎原著；邑田仁、米倉浩司編集『新分類牧野日本植物図鑑』北隆館、2017は、クレタケをハチクの別名としている。
- 9) <https://hanyu.baidu.com/zici/s?wd=%E8%8A%B1%E5%9D%9B&query=%E8%8A%B1%E5%9D%9B&srcid=28232&from=kg0#detailmean>
- 10) 2022年6月11日付、田麒麟氏の個人的な教示による。
- 11) 『明治の東京を描いた中国詩の集成』研究課題番号 21520376 平成21年度～平成24年度 科学研究費基盤研究（C）平成25年3月 研究代表者小川恒男。
- 12) 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店、2004。
- 13) 飛田範夫「江戸時代までの花壇についての史的考察」日本造園学会『ランドスケープ研究』61（5）、1997、pp.385-388
- 14) 飛田範夫『日本庭園の植栽史』京都大学学術出版会、2002
- 15) 飛田範夫「古代・中世の庭園と園芸との関連」日本造園学会『ランドスケープ研究』65（1）2001、pp.7-12
- 16) 飛田はこれをトキソウとしているが、根茎が長く伸びる湿地のラン科植物でなく、漢方薬に使われるセリ科のトウキ（当帰）が順当かもしれない。福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館文化財調査員（造園・庭園）の藤田若菜氏は、戦国大名にとっての薬草の意義を示唆された。（2022年10月20日付のご教示による）
- 17) 『看聞日記：乾坤。[3]』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591272>
- 18) 川上貢「伏見殿について」『日本建築学会論文報告集 第56号』pp.87-95、1957（昭和32）年6月
- 19) この花壇を含めた朝倉館は、2022年10月開館の福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館で原寸に再現された。 <https://www.fukuishimbun.co.jp/articles/-/1496957>

- <https://asakura-museum.pref.fukui.lg.jp/>
- 20) 概報に『一乗谷朝倉氏遺跡 1』足羽町教育委員会、1969 (p.5)、本報告に朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告 I 一朝倉館跡の調査』福井県教育委員会 1976 (p.44)。
- 21) 矩形の花壇が画面右下に見られる。
- https://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/viewer/zue_view.php?pn=km_03_02_006f&data=rinsen&mode=v
- 22) 概報として上越市教育委員会『国指定史跡春日山城跡発掘調査概報』I (昭和 52 年度) 1978～XI 1993 の各冊。報告書に上越市教育委員会『新潟県上越市春日山城跡発掘調査報告書』1992 がある。概報 XI (1993, p.1) は「春日山城は山城であるとの認識から、昭和 40 年代前半までは研究の主眼が山城部にあったことは否めない」とする。ここでいう昭和 40 年代前半までの研究は、高田市教育委員会『高田市文化財調査報告書 第 8 集 (春日山城)』1967 等をさしていると思われる。
- 23) 「……ここで説明する春日山城の曲輪名に関しては、すべて、便宜上城跡各所に立つ標識に示された名称を採っているのであって、これらの殆どが後世の伝承想像をおりませた春日山古城図によったもので本来固有名詞としてあったものではなく、今後再検討されるべきものであることご理解いただきたい。」伊藤正一「春日山城跡について—遺構を中心に—」高田市教育委員会 (1967 所収、p.5)。
- 24) 3 次に渡る嶋山城の発掘調査は、大門前方 (北側) の東西の空堀と大門を南に入った御平庭に対して行われ、「御花畑」と呼ばれる一角は発掘区外であった。なお、伊達氏麾下であった嶋山城主長沼氏は秀吉の 1590 (天正 18) 年の「奥州仕置」により所領を没収され、ここは蒲生氏郷の領地となった。嶋山城発掘調査団『田島町文化財調査報告書第 9 集 嶋山城 大門周辺第 1・第 2・第 3 次発掘調査報告』田島町教育委員会、1991。
- 25) 平賀源内の『番椒譜』『番椒凶譜』は平賀源内先生顕彰会編『平賀源内全集』名著刊行会、1970 の pp.1389-1408。
- 26) 例えば「〈岩瀬文庫資料に見る！〉江戸時代の園芸趣味」(西尾市岩瀬文庫企画展 2009 年 4 月～6 月) の解説は、園芸愛好層の拡大が対象植物の変化をもたらし、椿や桜など広い庭が必要な樹木から、長屋住まいなどでも楽しめる桜草や撫子、百合、福寿草、花菖蒲、菊、朝顔などの草花が多くの新品種を生み出したと指摘する。<https://iwasebunko.jp/event/exhibition/entry-150.html>
- 27) 「大名庭園のような大面積の回遊式庭園では、1 箇所に 1 種類の植物を大量に植えるということを行っている。草本類は花壇にまとめて植えて、これを 1 つの見所にしてしまうというように進展している。管理の困難さから草本類は花壇へ移すというように変化した。花壇を花壇として楽しむということ、回遊式庭園は生み出した」。
- 28) 岩本陽児「英国庭園の旗手たち①～④」『BISE』プレジデント社、No.6 2000 年夏号～No.9 2000 年冬号。
- 29) 三巻本。上巻、中巻で春夏と秋冬の植物と栽培法の簡潔な紹介。下巻で用土と肥料の解説、ボタン・シャクヤク、キク、ツバキ、ウメ、モモ、サクラ、ツツジの園芸品種リスト、最後にボタンとランの栽培法を掲載。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536268>
青木宏一郎『解説花壇綱目』創森社、2018 がある。
- 30) ボタン・シャクヤクに始まりツバキ、サザンカ、ツツジ、サツキ……と品種を解説し、栽培法を付記する。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1209343>
加藤要校注『花壇地錦抄・草花絵前集』平凡社、東洋文庫 [288]、1976 がある。
- 31) 三巻本。上巻冒頭に「花壇作様之事 花壇は西北よし花は南東向なり」と花壇と家屋の位置関係を述べ、一尺ばかりの針金で花の向きを調整する技法を紹介している。座敷に切り花の大輪菊を並べた菊花展の口絵。中巻は病害虫の対処法。下巻は菊の文化史。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2575979?tocOpened=1>

- 32) 三巻本。菊会の始まりなど、文化史的な内容から栽培法まで。屋根掛けをした菊花壇を見物人が囲んでいる口絵は、新宿御苑の「菊花壇展」を想起させる。東籬に菊を植えるには西を表とする等、花壇づくりのアドバイスがある。
- 33) 飛田（1998、p.387）にあるが、本文未詳。
- 34) 網羅的な園芸品種解説と山野草の紹介だが、花壇への言及はない。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2558810>
 なお飛田（1998、p.387）は『花壇叢木画譜』を寛政元（1789）年刊としている。
- 35) アサガオ園芸品種のイラスト集。鉢植え、生け花の図もあり、花壇ということではない。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607058>
- 36) 室（むろ）栽培、用土、肥料、植え替え、株分けなどの栽培法を、マツ、ウメ、ポタンなど 30 種について品種解説とともに紹介している。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536675>
- 37) 口絵に、板囲いの圃場で菊苗を育てている様子、定植後支柱をし、花に輪台をして屋根掛けした花壇をつくって、鑑賞に供している様子が描かれている。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536700>
- 38) ただし、こうした語釈を与える辞典類を知らない。なお『日国大』は「文壇」の初出として 19 世紀半ばの『篋園全集』（1844）をあげている。
- 39) 日本玩具博物館の特別展解説
<https://japan-toy-museum.org/archives/exhibition/special/%E3%80%8C%E9%9B%9B%E3%81%BE%E3%81%A4%E3%82%8A%EF%BD%9E%E6%B1%9F%E6%88%B8%E3%81%AE%E9%9B%9B%E3%83%BB%E4%BA%AC%E9%98%AA%E3%81%AE%E9%9B%9B%E3%80%8D>
- 40) 横浜市 HP 「横浜の代表的な街路樹と歴史」
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/doro/anzenshisetsu/yasashii/gairoju/rekishi.html#:~:text=%E6%A8%AA%E6%B5%9C%E3%81%AF%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E8%BF%91%E4%BB%A3,%E3%82%A2%E3%82%AD%E3%83%8B%E3%83%AC%E3%81%AB%E4%BB%A3%E3%82%8F%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>
 ただし、『日国大』は 16 世紀半ばの『玉塵抄』（1563）五三「朝廷の前宮闕の馬場に、街路の両方に槐をなみうえらるぞ」の用例をあげていて、こちらが古い。戦国時代の京都の皇居前に、エンジュの街路樹が作られたというのである。
- 41) 昭和 7（1932）年に東京市訓令がはじめて「街路樹」を使用。それまでは行路樹、行道樹、道路樹、擁道樹と呼ばれていた。擁道樹の初出は『日本農業雑誌』明治 12 年 10 月号とする。近藤三雄・平野正裕『絵図と写真でたどる 明治の園芸と緑化』誠文堂新光社、2017。なお、福羽逸人は『回顧録』第三篇第三章で「行路樹」を使っている。環境省自然環境局監修『福羽逸人回顧録』国民公園協会新宿御苑、2006。
- 42) 矢田挿雲『江戸から東京へ』中央公論社、1980。（東光閣書店版は 1922-25 刊）
- 43) 日本園芸研究会編、戸田節次郎、池田謙蔵ほか 15 名『明治園藝史』西ヶ原叢書刊行会、1918。
- 44) 原著は大正 4（1915）年の刊という。
- 45) 最初の 10 年は第一編に庭園荒蕪と破壊。第二編に庭園・公園の新修と改修。第三編に禁苑と旧苑縦覧と公園設置。第四編は第二期・第三期の新旧庭園修治、公園・神苑の新設。第五編で日本の造園方法書を略説し流派を論じている。なお『作庭記』は京極良経の著ではないとの指摘がある。
- 46) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954476> 202 コマ目。
- 47) 後に高等商業の教授となる経済史家の横井時冬（1860-1906）は、20 代だった明治 22 年の著作で、「敗壞主義的」な明治維新がもたらした新しいものほど良しとする時代精神のために庭園が大被害を被ったこと。とりわけ大名や寺院所属の庭園が荒廃したことを嘆く。西洋式庭園の導入も、建築と

の不調和を批判した。なお、桂離宮をブルーノ・タウトの半世紀前に早くも称揚しているのは先駆的である。横井時冬『園芸考』大八洲学会、1889。なお、横井は園芸考のタイトルでもっぱら庭園史を論じているが、「園芸」の領域について1889年設立の日本園芸会でも論議があったことを近藤・平野(2017)が紹介している。

- 48) 読売新聞1904(明治37)年5月3日朝刊。
- 49) 翌13日の広告に「菊朝顔商梅の恵」とあり、「梅の恵」が園芸商と分かる。
- 50) <https://blog.goo.ne.jp/chiku39/e/d96c018c8ca3364bf6190deca656ea19>
- 51) 注4に上掲の奈良文化財研究所(2007)「討議録」に所収。
- 52) public garden(s)。parkは本来「公園」ではなく、王侯貴族のお狩場として囲われた土地である。これが市民開放されて公園化した。例えばハイドパークの市民開放は17世紀。
- 53) ロンドンにあるThe Garden MuseumのPOSTCARDS, PUBLIC PARKS AND CARPET BEDDING。
<https://gardenmuseum.org.uk/digital-traineeship-blog-postcards-public-parks-and-carpet-bedding/#:~:text=Carpet%20bedding%20is%20the%20planting,gardener%20at%20Cliveden%20in%20Buckinghamshire.> (一部補筆)
- 54) 『日本大百科全書』『世界大百科事典』および <https://smtrc.jp/town-archives/city/hibiya/p02.html> から簡約。
- 55) 新宿御苑公式HPおよび、田中正大『世界大百科事典』から要約。福羽逸人『回顧録』第二篇第二章に詳しい。
- 56) <https://www.city.hanyu.lg.jp/docs/2012040300130/>
- 57) 左久良書房、明治42年版 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/885426> 236コマ目(p.460)。
- 58) 木村陽二郎監修『図説草木辞苑』柏書房、1988、p.293 ははこぐさの項。
- 59) 羽生市立図書館、寺本真由美氏のご教示による(2022年10月31日)。
- 60) 近藤正一『名園五十種』博文館、1910
- 61) 内山善三郎『帝都復興事業大観』日本統計普及会、1930
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1465960> 第18章「公園」はコマ番号155-202。
- 62) ちなみに2022年4月1日現在、都市公園と都市公園以外の公園面積は合計約8,058haで、都民一人当たりの公園面積は約5.76㎡という。ところが都市公園は2,049haなので、一人当たりの公園面積は1.46㎡すなわち0.442坪と震災後を若干下回っている。
https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jigyoku/park/tokyo_kouen/index.html#:~:text=%E5%85%AC%E5%9C%92%E3%81%AE%E7%8F%BE%E7%8A%B6,%E7%B4%845.76m%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82
- 63) 172コマ目に日比谷公園平面図。画面東に矩形の花壇がある。
- 64) なお、路上架空線を歩道内の地下共同溝に収納した。日本の電線地中化の先駆であった。
- 65) 向島百花園では、震災で避難・仮住まいした市民が、植栽木を伐って燃料とした。
- 66) 191コマ目。
- 67) 199コマ目。
- 68) 朝日新聞1936(昭和11)年12月19日 東京朝刊 10頁。
- 69) 毎日新聞1950年7月25日朝刊 4頁。
- 70) 読売新聞1951年1月6日朝刊 4頁。
- 71) 読売新聞1951年6月1日朝刊 4頁。
- 72) 毎日新聞1951年8月24日朝刊 4頁。
- 73) 毎日新聞1951年10月31日朝刊 4頁。
- 74) 毎日新聞1951年12月30日朝刊 4頁。

- 75) 毎日新聞 1952年4月20日朝刊 4頁。
- 76) 朝日新聞 1952年11月16日東京朝刊 8頁。
- 77) 毎日新聞 1953年8月20日東京朝刊 6頁。
- 78) 初田香成「石川栄耀の盛り場論とその都市史的意義—戦災復興期の東京における実践を中心として—」『日本建築学会計画系論文集』第590号、2005年、pp.215-220。
- 79) 石川栄耀「都市計画に於ける Shopping Center の研究とその復興都市計画上の措置」『都市計画』6号、1953年、pp.148-151。
- 80) 「一老人の願い実り街路に花いっぱい コツコツ手入れ一年 遊馬さん いまでは町内も協力」読売新聞 1963年9月5日夕刊。
- 81) 大槻文平「発刊にあたって」『新生活運動協会二十五年の歩み』財団法人新生活運動協会、1982年(非売品)。
- 82) 大澤暢太郎、上掲書「第1章 新日本の建設を旗印に—新生活運動通史」
- 83) 1970年度に八王子青年会議所、72年度に羽村町婦人会、町田市境川団地自治会などが入賞している。『東京都新生活運動十五年のあゆみ』東京都新生活運動協会、1973、p.22。
- 84) とはいえ、静岡県三島沼津石油コンビナート反対運動の社会的意味をいち早く取り上げ、一冊の調査報告書としてまとめたのは協会であった。(上掲書 p.64)
- 85) 2022年6月5日、街路花壇研究会の里親花壇聞き取り(多摩市永山)。

謝辞：今回も多くの方にお世話になりました。すでに脚注でお名前を挙げさせていただいた方以外に、未来の街路花壇を考える会の宮内泰之代表(恵泉女学園大学准教授)と会員各位にはいつも刺激をいただいています。和光大学附属梅根記念図書館の瀧桂子・楯形七海両氏には例によって調査の便宜を図っていただきました。皆様に厚くお礼を申し上げます。